

ハンガリー語の可能接辞による受動表現について

野瀬昌彦

キーワード:ハンガリー語, 可能接辞, 非人称可能構文, 可能動詞現在分詞形, 可能受動

1. はじめに

ハンガリー語では、動詞語幹に"-hat/ -het"という可能接辞を付加することで、可能動詞を形成することができる。可能接辞はすべての動詞に付加することができ、可能動詞は屈折可能な派生動詞である。この可能動詞において、主語を明示せずに、1人称複数形、または3人称複数形の屈折をする場合、動作主不明の非人称可能構文を形成する。さらに、可能動詞に現在分詞が付加した可能動詞現在分詞形において、受動の意味が観察される。

本稿は上で指摘した2つの可能動詞の用法に注目する¹。まず、この2つの可能動詞の用法に、受動の意味が観察されることを指し示す。そして、可能動詞現在分詞形が意味的に、そして統語的に明白な受動文形成の要素であると主張する。

2. 可能接辞による受動の用法

可能動詞は、動詞語幹に可能接辞"-hat/ -het"を付加することで形成される。動詞語幹に可能接辞を加えることで、(1)で示すように、可能性や能力の意味を付加する²。その点で、可能接辞はムードに関する情報を持つ接辞である (Keresztes 1995: 62)。

(1)

ad > ad-hat (与えることができる)

lő > lő-het (撃つことができる)

さらに可能動詞がそれ自体で可能動詞語幹となり、人称、数、時制等の屈折をする。本稿では、この可能動詞が受動の意味を有する例があることを指摘する。

可能動詞が受動の意味を有すると思われる現象は以下の2点である。第一は、屈折部分を明確な主語を伴わずに、1人称複数形、または3人称複数形にすることで、非人称可能構文を形成する場合である。第二は、可能動詞の現在分詞形の場合である。可能動詞の現在分詞形

とは、可能接辞に現在分詞の形"-ó/- ő"が付加されるものである。次に、この2つの可能動詞の用法がどのように受動の意味を表すかを示す。

2.1. 非人称可能構文

はじめに、可能動詞語幹に1人称複数形や3人称複数形の屈折が付加する非人称可能構文について見ることにする。この形式は「動詞語幹+可能接辞+屈折(1人称複数形/3人称複数形)」である。この構文では主語である人称代名詞"mi"(1人称複数:我々)"ők"(3人称複数:彼ら)が文上で現れずに、動詞屈折にだけ示されることが重要である。

(2) a. Mi olvas-hat-unk ez-t a magazin-t.

我々 読む-可-1 複 これ-対 その 雑誌-対

「我々がこの雑誌を読むことができる」

b. Ez-t a magazin-t olvas-hat-unk.

「この雑誌が読まれる」

(3) a. Ők talál-hat-nak az-t a bár-t

彼ら 見つける-可-3 複 あの-対 その バー-対

「彼らがあこのバーを見つけてることができる」

b. Az-t a bár-t talál-hat-nak.

「あこのバーが見つけられる」

例文の(2b)や(3b)で示したように、動詞屈折部分に1人称複数や3人称複数の屈折形式があるため、(2a)や(3a)のように主語の部分の人称代名詞,"mi"(我々)"ők"(彼ら)が必ず文上で現れる必要がない。特に、話者が動作主である主語を明示したくない場合や、不明である場合、または総称的である場合、(2b)や(3b)のように、主語が文上に現れない。その代わりに、動詞の屈折部分に、1人称複数形、または3人称複数形でもって、暗黙/不明、または総称的な動作主を暗示させる³。この場合、受動の意味が観察される。さらに、実際の例文を示す。

(4) A mássalhangzós tö-ve-t legbiztosabban a 3. szótári

その 子音の 語幹-複-対 最も確実に その3番目の 辞書の

alak-ból (egy partitívus) állapít-hat-juk meg.

形式-場 (1つの 分格) 決定する-可-1 複 接

「子音語幹を3番目の辞書形(分格)から最も確実に決定することができる(子音語幹が決定される)」

(Karanko, Keresztes & Knivilä, 1985: *Finn Nyelvkönyv*: 79)

- (5) A kompatibilitási kapcsolat kidolgozás-a-kor rész-ben
 その 適合性の 関係 作成-所-とき 部分-場
 az egyszerűség szempont-jai-t is figyelem-be ve-het-jük.
 その 簡素さ 視点-複所-対 もまた 考慮-場 入れる-可-1 複
 「その適合性の関係の作成の際に、部分的にその簡素さの視点をも考慮に入れることができる（簡素さの視点が考慮に入れられる）」

(Chomsky, 1995: *Mondattani szerkezetek*: 65⁴)

- (6) a mód-ot, ahogy az ilyen típusú példány-ok-at
 その 方法-対 のような その そのような タイプの 例-複-対
 használ-ják (vagy használ-hat-ják),
 使用する-3 複 (それとも 使用する-可-3 複)
 「そのようなタイプの例を使用する、または使用することができる方法を（そのような例が使用される）」

(Chomsky, 1995: *Mondattani szerkezetek*: 111)

例文(4)-(6)のような文が、受動態を持たないとされるハンガリー語では頻繁に観察される。このような明確な主語を持たないものを、非人称可能構文と名づける。これらの非人称可能構文において、不明の動作主を表す手段として、1人称複数形や3人称複数形の動詞屈折が使用されている。しかし、これらの例文の前の部分または文脈で、動作主である1人称複数である「我々」や3人称複数である「彼等」は現れることはない。

- (7) Az autó-m új Mercedes-Benz.
 その クルマ-所 新しい メルセデスベンツ
 Az autó-m-at el-lop-hat-juk/ -ják mert itt külváros veszélyes.
 その クルマ-所-対 接-盗む-可-1 複/3 複 ここ 郊外 危険
 「私の車は新しいメルセデスベンツだ。ここ郊外は危険なので、私の車が盗まれるかもしれない、盗まれることができる（「我々が／彼らが」私の車を盗むかもしれない）」

例文(7)では、前の文脈において「我々」や「彼等」の存在は一切出ていない。しかしながら、文脈や前の部分の指示がない上で、1人称複数形動詞や3人称複数形動詞の屈折形を使用して非人称可能構文を作ることができる。私の車であるメルセデスベンツに関して、郊外に放置しておくのは危険である。そのために、そのクルマが盗まれる可能性がある。その盗み手は具体的な「我々」でも「彼等」ではない。それにも関わらず、潜在的な動作主として、1

人称複数動詞や3人称複数動詞の形式が不定の動作主を示すために使用されている。この場合、動詞屈折形は、具体的な動作主主語である「我々」や「彼等」を指し示していない。むしろ、誰を指示することもない非人称である。

この非人称可能構文は、動作主が不明の場合は3人称複数形の屈折で、総称的な動作主の場合は1人称複数形で表される。一方で、被動作主は対格を伴う直接目的語で表される。つまり、動作主の存在が屈折形ではめかれるが、主語として明示されないことで、動作主が文上から意味的に排除されることになる。その結果、被動作主が着目されることで、受動を含意する。しかしながら、この非人称可能構文では被動作主が対格で標示される点で、統語的には能動であると言える。

2.2. 可能動詞現在分詞形

次に、可能動詞に現在分詞形“-ó/ -ő”を付加した、可能動詞現在分詞形について論じる。この形式“-ható/ -hető”が受動の意味を表すことを示すのであるが、形式の中に可能接辞があるため、正確には可能受動の意味を指し示す。可能動詞現在分詞形は、文法書でも受動の意味を表すことが指摘されている⁵。具体的には以下のような記述である。

“Többnyire szenvedő jelentésű származékokat képez,” (ほとんどの場合⁶、受動を意味する派生を形成する) (MMNy: 138)

加えて、

“Verbs formed with the modal suffix “-hat/ -het” have regular present participle forms, whose meaning is, in most cases, passive.” (Keresztes 1995: 55) (ムードの意味を持つ接尾辞“-hat/ -het”を伴って形成された動詞は規則的な現在分詞形を持ち、その現在分詞形はほとんどの場合、受動の意味を持つ)

可能動詞現在分詞形は、「動詞語幹＋可能接辞＋分詞」で形成される。下の(7)に具体的な分詞形の例を挙げる。この現在分詞形は人称の屈折を持たない⁷。

(8)

vár-hat > vár-hat-ó (待つことができる > 待たれる)
olvas-hat > olvas-hat-ó (読むことができる > 読まれることができる)
kap-hat > kap-hat-ó (得ることができる > 得られる)

それでは、可能動詞現在分詞形を使用した例を観察してみよう。

(9) Néhány kilométer-re talál-ható Makarská-tól Omis,
いくつかの キロ-場 見つける-可分 マカルスカ-場 オミス]

itt ömlik a tengerbe a Cetina.

ここで 注ぐ その海-場 その ツェティナ

「数キロにマカルスカからオミスが見られる, ここでツェティナ川が海へ注ぐ」

(Az Utazó, 1999 Május: 22)

- (10) Több légitársaság különjárat-ai-n lehetőség van
多くの 航空会社 チャーター-所複-場 可能性 ある
mini-ital-ok, pezsgő vásárlás-á-ra, illetve sok eset-ben
ミニ飲み物-複 シャンパン 購入-所-場 または 多くの 場合-場
a fedélzet-en vámmentes áru (tax-free) is kap-ható.
その デッキ-場 免税の 品物 もまた 獲得する-可分
「より多くの航空会社のチャーターフライトで, 飲み物やシャンパンの購買の可能性が
ある, または多くの場合, デッキで免税品も手に入れられる」

(Az Utazó, 1999 Május: 46)

- (11) Hasonlóképpen, valamely formalizál-t matematikai rendszer
同様に 何らかの 形式化する-過 数学の システム
“mondat-ai” is nyelv-nek tekint-hető-k.
“文-複” もまた 言語-与 みなす-可分-複
「同様に, 何らかの形式化された数学の体系の文も, 言語とみなされる」

(Chomsky, 1995: *Mondattani szerkezetek*: 15)

- (12) Ha az általános alanyú kifejezés-be valamiképpen a beszélő is
もし その 総称の 主語の 表現-場 何らかの その話者 も
bele-ér-hető, magyar-ra többes szám 1. személl-yel fordít-ható.
接-及ぶ-可分 ハンガリー語-場 複数 1 人称-具 翻訳する-可分
「もし総称主語の表現に何らかの話者も及ぶなら, ハンガリー語には1人称複数でもつ
て翻訳される」

(Karanko, Keresztes & Knivilä, 1985: *Finn Nyelvkönyv*: 184)

- (13) Módhatározó ki-fejez-hető ez-en kívül esetrag-gal is.
様態の副詞 接-表現する-可分 この-場 以外 格-具 もまた
「様態の副詞がこれ以外の格とも表現される」

(Karanko, Keresztes & Knivilä, 1985: *Finn Nyelvkönyv*: 221)

- (14) A városnev-ek-ben a magyar-hoz hasonló
 その 町の名前-複-場 その ハンガリー語-場 似た
 ingadozás tapasztal-ható,
 変異 経験する-可分

「町の名前では、ハンガリー語に似た変異が経験される」

(Karanko, Keresztes & Knivilä, 1985: *Finn Nyelvkönyv*: 56)

まず着目すべき点は、可能動詞現在分詞形が述部として現れる点である。現在分詞形には名詞を修飾する働きがあるが、本稿の議論とは関係がないので、説明は省略する。次に、可能動詞現在分詞形は、被動作主が主格を伴う主語として現れる点である。一方で、動作主は通常、文上に現れることはできない。つまり、能動文と対照した以下の例で説明する。

- (15)a. Én olvas-hat-om a mai újság-ot.
 私 読む-可-1 単 その 今日の 新聞-対
 「私は今日の新聞を読むことができる」

(15a)は単なる能動文で、可能動詞現在分詞形を使用して表現したのが、次の例文(15b)である。

- (15)b. A mai újság olvas-ható.
 その 今日の 新聞 読む-可分
 「今日の新聞が読まれることができる／読まれる」

ここで、両者の例の対照から、以下の事実が明らかとなる。被動作主たる「新聞」「újság」が対格を伴った直接目的語ではなく、可能動詞の現在分詞形の例では、主格の主語として出現する点である。また、例(12)では、動作の動作主である「私」「én」は文上に現れることができない。従って例文(12)は、「私によって」という意味解釈をすることは許されないし、統語的に"általam"（私によって）のような後置詞付加も許されない。通常、可能動詞現在分詞形では、総称的な「我々によって」という総称的な動作主の意味解釈のみ許される。この場合、可能動詞現在分詞形には、非人称可能構文のような1人称複数や3人称複数の動詞屈折形が付加しない。つまり、動作主に関する情報が形式的には一切明示されない。

3. 可能受動の形式と意味

ハンガリー語の可能接辞を伴う可能動詞で、受動が含意される形式について、例を挙げて観察してきた。ここで、上で指摘した2つの形式をまとめ、統語的、意味的に受動が表される

理由を論じる。

ここで、非人称可能構文と可能動詞現在分詞形との相違を指摘したい。以下に例を示す。

(16)a. Ez-t a CD-t ab-ban az bolt-ban kap-hat-unk.
これ-対 その CD-対 あの-場 その店-場 獲得する-可-1 複
「この CD をあの店で手に入れることができる：この CD はあの店で手に入れられる」

b. Ez a CD ab-ban az bolt-ban kap-ható.
この その CD あの-場 その店-場 獲得する-可分
「この CD はあの店で手に入れられる」

まず、非人称可能構文(16a)について、これは被動作主が主格を伴う主語とならず、直接目的語で標示される点で、統語的には能動である。しかし、この構文は、英語の受動文からハンガリー語への翻訳において、受動文の代替表現となりうる。意味的には、「我々が手に入れることができる>手に入れられる」というように受動を含意する。これは、動詞の屈折部分に1人称複数形や3人称複数形を持ち、明白な主語を伴わない場合、非人称の可能構文となる。この場合、動作の動作主が明確に示されず、動詞の屈折部分で示されることになる。その結果、意味的に動作主の降格が実現されることになり、受動の意味が現れるわけである。

次に、可能動詞現在分詞形(16b)について、これは被動作主が主語で現れる点で、統語的に受動の条件を満たしている。この形式も非人称可能構文と同様に、英語の受動文からハンガリー語への翻訳において、受動文の代替表現となりうる。意味的には、「手に入れることのできる状況にある>手に入れられる」というように受動を含意する。しかし、非人称可能構文と異なり、可能動詞現在分詞形は人称の屈折はしないため、動作主の存在は不明である。また、文上で動作主が格や後置詞を伴って現れることは通常ない。この構文においては、被動作主が主格を伴う主語で現れる点で、被動作主の昇格が実現されることになり、受動の意味が現れるわけである。ただし、降格された動作主は文中に現れることができない⁸。

(17)* Ez a könyv olvas-ható okos diák által / okos diák-nak
この その本 読む-可分 賢い 学生 によって/ 賢い 学生-与
「この本は（賢い学生によって／賢い学生に）読まれる」

4. 結論

可能接尾辞を伴う可能動詞において、受動の意味を表す表現として、非人称可能構文と可能動詞現在分詞形の用法がある。特に、可能動詞の現在分詞形に関しては、統語的にも意味的

にも受動である。なぜなら、被動作主の昇格を伴い、被動作主が主語となっているからである。意味的には、可能の意味を引き継いだ上で、”talál-hat > talál-hat-ó”「(被動作主を) 見つけることができる」>「見つけることができる状況にある」>「(被動作主が) 見つけられる⁹⁾」という含意から、受動の意味への解釈を許す。その場合、可能動詞現在分詞形”-ható/ -hető”は、受動を形成する要素、つまり受動形態素であると言える。

注

* ハンガリー語の文のチェックでは、Szendı Attila, Németh Szabolcs にお世話になった。記して感謝したい。

- 1 本稿で取り上げる2つの用法に加え、”-hat/ -het”の後に、「一を欠く」という意味を持つ形容詞を形成する接尾辞”-t(a)lan/ -t(e)len”を付加した、”-hatalan/ -hetelen”の用法がある (Cf. MMNy: 138)。これは、例えば、”használ-hatatlan” (使用できない、使用されない) ”megold-hatatlan” (解決できない、解決されない) と受動の意味を含意する場合がある。しかし、今回の本稿では扱わない。
- 2 Kiefer (1981)では、動詞接尾辞”-hat/ -het”の用法を意味的には、Epistemic possibility, Subjective possibility, Deontic possibility, Circumstantial possibility, Boulomaic possibility, Dispositional possibility, Dissociating possibilityという7種類のモダリティの意味を持つと論じている。
- 3 非人称可能構文に関して、筆者の調査では、1人称複数形の例が圧倒的に多く、3人称複数形の例はあまり観察されなかった。一方、可能接辞を伴わない通常の非人称構文では、3人称複数形の例が多数観察される。3人称複数形の非人称可能構文が少ない理由として、可能接辞が有するモダリティの意味に、話者の主観的な態度が含まれる点があると思われる。つまり、動詞屈折形の部分での1人称と3人称の違いが残っている。動作主に1人称の「私」が含まれる場合、1人称複数形動詞が使用され、動作主に「私」が含まれない場合、3人称複数形動詞が使用される。
- 4 これは正確には”Chomsky, Noam (translated by Zólyomi Gábor). 1995. *Mondattani szerkezetek*. Budapest: Osiris-Századvég”は、”Chomsky, Noam. 1957. *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton” のハンガリー語の翻訳版である。この翻訳において、多くの英語の受動文が、非人称可能構文や可能動詞現在分詞形として現れている。
- 5 可能動詞の分詞形には、本稿で示した現在分詞形の他に、過去分詞形”-ott/ -ett”と未来分詞形”-andó/ -endő”が存在する。現在分詞形に加えて、過去分詞形や未来分詞形でも受動の意味が観察される例がある。しかし、過去分詞形は主に名詞句を修飾するのに使用され、未来分詞形は極めて例が少ないということで、本稿の考察では扱わない。
- 6 多くの可能動詞現在分詞形において、受動の意味が観察されると指摘されているが、これは動詞が他動詞である場合に限る。動詞が自動詞の場合、単なる能動の意味のみが観察さ

れる。"sétál-ható" (散歩することができる) "elér-hető" (到着することができる, 達することができる) "le-hető" (ありうる)。つまり, 動詞の他動性が高いとき, 被動作主をたる直接目的語を有するとき, 受動の意味解釈が可能であると言える。

- 7 可能動詞現在分詞形は, その語尾に人称の屈折を持つことはない, しかし, 注5で指摘したように, 時制による屈折は存在する。さらに, 現在分詞形では, 数においても屈折し, 複数の場合, "olvas-ható-k"のように, 複数のマーカーである'k'要素を持つ。
- 8 非人称可能構文においては, 1人称複数動詞の場合, 動作主に「私」が含意される。逆に3人称複数動詞の場合は, 動作主に「私」が確実に除外される。これは, 両者ともすでに非人称受動であるのだが, 1人称と3人称動詞屈折で, 「我々」と「彼ら」という意味的な相違が非人称構文でも維持されているからである。hato-/ -hetőの可能動詞現在分詞形においては, 動作主は不定なものか, 総称的な場合に限定され, 「私」の含意または除外は存在しない。ただし, "szerintem" (私によれば) などの話者または経験者の存在を示す後置詞が文中にあると, 話者または経験者を明示することが可能である。
- 9 可能動詞現在分詞形は受動の意味を持つと共に, 英語や日本語に観察される, いわゆる「中間態(middle)」の意味を指し示すためにも使用される。

(1) a. This book sells well.

b. この本はよく売れる。

c. Ez a könyv jól el-ad-ható

この その 本 よく 接-与える-可分

「この本はよく売れる」

略号

対	対格	接	動詞接頭辞	1	1人称
与	与格	可	可能接辞	2	2人称
具	具格	過	過去時制	3	3人称
場	場所格	分	現在分詞形	単	単数形
所	所有接尾辞			複	複数形

参考文献

A Mai Magyar Nylev (MMNy): Bencédy József, Fábian Pál & Velcsov Mártonné. 1968. Budapest: Nemzeti Tankönyvkiadó.

A Magyar Nyelv Könyve (MNyK): Jászó, A. Anna(ed.). 1999. Budapest: Trezor Kiadó.

Magyar Grammatika (MG): Balogh Judit, Haader Lea, Keszler Borbála, Kugler Nóra, Laczkó Krisztina & Lengyel Klára. 2000. Budapest: Nemzeti Tankönyvkiadó.

Csepregi, Márta. 1991. *Unkarin kilioppi*. Helsinki: Finn Lectura.

Haspelamth, Martin, 1990. The grammaticization of passive morphology. *Studies in Language* 14: 25-72.

- Kepecs, Ágnes, 1986. A contrastive analysis of English passive structures and their Hungarian equivalents. In: Stephanides, Éva H. (ed.) *Contrasting English with Hungarian*. Budapest: Akadémiai Kiadó: 23-87.
- Keresztes, László. 1995. *A practical Hungarian grammar*. Debrecen: Debrecen Nyári Egyetem.
- Kiefer, Ferenc. 1981. What is possible in Hungarian? *Acta Linguistica Academica Scientiarum Hungaricae* 31: 147-185.

(東北大学大学院文学研究科 博士後期課程)

nosem@sal.tohoku.ac.jp

(ハンガリー語要旨)

Szervedő jelentésű kifejezés a ható igével a magyar nyelvben
(Passive expressions with the modal suffix „-hat/ -het” in Hungarian)

Masahiko Nose

Kivonat

A magyar nyelvben van „-hat/ -het” ige képző. Ez a ható ige mutat szenvedő jelentés. Általában a ható ige fejez ki, hogy az alanynak megvan a lehetősége a cselekvés elvégzésére. Ezen kívül a ható ige használata van benne a szenvedő jelentése. Egik, amikor használunk a többes szám első/ harmadik személyű igeragozást (de „mi” vagy „ők” - alany nélkül), az a személytelen szerkezet a ható igével. Ebben a szerkezetben találhatunk a szenvedő jelentést a személytelenségért (ágens nélküliség). Ebben az esetben a páciens marad az accusativussal tárgyként. Másik, amikor használunk a ható igét a folyamatos melléknév igenévvel, az a „-ható/ -hető” szerkezet. Ebben a szerkezetben találhatunk a szenvedő jelentést a ható igéből belőle. Ebben az esetben a páciens jön a nominativussal alany helyre. Ebben a cikkben mutatjuk, hogyan ezek a szerkezetek jeleznek a szenvedő jelentéset.